

狂言詞集 (ふーほんぼん)

古 川 久

ふ

ふ「分」えんまわうがゆくさきまでふがわるひ(朝比奈―古本)

割前。率。ぶ。天草本平家物語「さても平家はいかう分が悪か

つたの」天草本伊曾保物語「さてもわれは符の悪いものかな」

唐糸草子「唐糸がふのわるさ」甲陽軍鑑「惣別人間は、大小に

よらず、ふのよき人のまねはせぬ者なり」

ぶあんない「無案内」不案内に御座る(八幡前―能)不案内にお

りやる(萩大名―選)

初対面の挨拶語。

ぶい「無異」はて扱そちが頼うだ者は無異な者ちやおしやつた

が、思ひの外病身者ぢやな(繩絢―篇)

異状のないこと。壮健。平安。無事。

ぶいん「無音」此間久しうぶいんいたひたほとに(鶏聲―古本)

私の不音の段はおごうにめんぜられて被下い(船渡聲―能)

音信のないこと。無沙汰。疎遠。

ふう フウ、わごりよの形を最前からつくくを見るに、身延参

りをせいで叶はぬなりでおりやる(宗論―能)

あきれる時の歎声。ふうん。

ふうと 石のからうとの蓋のふうとする程唄ひ入れ(二千石―全

集)

ふはふはと。一杯になるさま。

ぶうぶう…… ぶうぶうくちうく(栗焼―選)

栗の焼ける擬音。

ぶえん「無塩」ぶえんのめでたいを十かけ、御年貢に上まらする

(かくすい―古本)

塩気を用ひぬもの、すなはち新鮮な魚介類を言ふ。「(無塩の

意)生魚。岩手・佐渡・茨城県久慈郡・静岡・岐阜県吉城郡・

奈良・和歌山・淡路島・岡山・島根県那賀郡・山口・四国・九

州」(全国方言辞典)。天草本平家物語「新しいものをば何を

も無塩といふと心得て」天草版平家物語伊曾保物語言葉の和らげ「Bu-

yen Xiuono tzucanu iunadono taguy」醒睡笑「されば

ぶえんの時ははくらは、今はさがりたればくらくといふと申
したり」

ふかい「深い」ふかひかうくじやぞ(薬水―古本)深い事はあ

るまいぞ(柿山伏―全集)はて扱戲事の深い人ぢや(三人夫―

篇)頼うだ人はちとおざれ事深う御座る(萩大名―五十番)こ

れは汝かいひふんにしてきやつにふかふ思はせ(文相撰―記)

並並ならぬ。格別な。天草本平家物語「信濃一国の者こそ従ひ

つくとも深いことはあるまいぞ」

ふかがらす「深がらす」汝がぶんで深がらせておけ(今参―能)

汝が分としてふかゞらせ(蚊相撰―選)

深いと思はせる。前項参照。

ふかくさかわらけ「深草土器」深草土器に南天ちくのかいしき

(鱸庖丁―篇)

山城国紀伊郡(今の京都市伏見区)深草で焼き出した土器。

ふかくさまつり「深草祭」今日は加茂の競馬深草祭で御座る(見

物左衛門―二十番)

深草の藤森神社で行はれる、六月五日の例祭の別称。

ふかしい「深い」ねたりともふかしひ事は有まひが(こひ聲―

古本)芸と申て深い事もござらぬが(文相撰―能)深しう吞

はすまい。只一つきかせて呉さしめ(河原太郎―能)深しう取

りは致しませぬ。何卒許させて下されい(瓜盗人―全集)

「深し」を「美しい」や「委しい」の類の語に準じて訛つた口

語で、「深い」に同じ。心中重井筒「ふかしいことこそ此いへ

やしきさうおうに」

ふがてん「不合点」さりとは。そなたは又不合点な人ぢや(川

上―三百番)

聞き分けのないこと。不承知。源氏烏帽子折「エ、不合点な、

いで某が追退けん」

ぶかん「無勘」頃日笑元のわかい衆が寄合て。連歌をなさるゝに

付。某此道にぶかなりといへども(箕潜―記)

勘能でないこと。下手。

ふきあげ「吹上」おぐしを唐子に揃へさせられたもござり、或は

ふきあげなどに結ばせられて(栗焼―五十番)

「女の髪の毛の名「しかたはなし」」(俚言集覧)。吹上髪とも言

ひ、髪をふくらせてあげた髷のこと。『狂言篇』だけは「吹わけ

になつてゐるが、これは誤植かも知れない。

ふきとゆうも… ふきといふも草の名、めうがといふも草の名、

ふうき自在徳ありて、めうがあらせおはしませ（警女座頭―五十番）

落と富貴、茗荷と冥加とを掛けたもので、箏組歌ふき組の第一歌にも用ゐられてゐる。

ぶきよう「無興」そのまゝかやいたらば御ぶきようであらう（鈍

根草―虎清）

無機嫌。不快。不興。毛詩抄「管蔡を打れたほどに、成王の無興せられたよ」、醒睡笑「無興の」、昨日は今日の物語「ぶけう千万なり」、室町時代小歌集「手打られいでは無興ぢや」、油糟「我むすこなまぼめ也と無興して」

ぶきれい「無綺麗」安い事では御座れども此間掃除を致さいで不綺麗に御座る程になりますまい（萩大名―独習）

綺麗でないこと。

ふく「復」さりながら覚ゆるやうに路次すがらふく致いて参らう

（名取川―篇）

復誦の略。

ふく 此鯛、荒海の魚なれば腹を前にして、まづ鱗をさつとふく

事ぢや（惣八―五十番）

「引く」の訛りか。取り除く意。

ぶく「服」あの柿を一つひいやりとぶく致いたらば、喉のかはきも止まうに（柿山伏―篇）

服用すること。ぶくす参照。

ふくありのみ「福有りの実」数々多き実の中に。福ありの実に御銚を添へて。二人に与へたび給ひ（清水毘沙門―三百番）

「梨」が「無し」に通ずるのを忌んで言ふ語。略して「ありのみ」と言ふ。

ぶくす「服す」罪人も来たらば。取つて服せうと思ふところへ汝が来た（朝比奈―三百番）たつた今取つて服するほどに。構へてそこを去り居るな（釣狐―選）

服用する。飲む。食べる。本草本金句集「薬を服す」幸若、大臣「此飯ぶくしてあればとて。いく程命のながらへん」

ふくちゅう「腹中」きやつが腹中は広さうな（今参―三百番）

心の中。度量。

ふくてん「福天」毎年福天の御前へ参て年を取ます（福の神―能）福の神。唐系草子「江の島のふくてんは、福寿海無量の宝珠をいだき参られたり」

ふくとくの…… 福徳の数有の実の榮えては悪事災難なしとこそ聞け（勝栗―篇）

「有り」と「無し」とを対照させた狂歌。

ふくりき「福力」我を信ずる衆生には七珍万宝の宝を与へる事、
此大黒天が福力にてあるが（蛭子大黒―篇）

裕福で勢力のあること。富力。醒睡笑「百姓の福力なるあり」
ふくろしようけいになき…… 梟松桂に鳴き、狐蘭菊に棲む（鬼
が宿―三百番）

『白氏文集』第一・凶宅の詩に「梟鳴松桂枝、狐蔵蘭菊叢」
ふける くるみにふける友鳥（いたいけしたる物―選）

熱中する意の「耽る」であらうか。

ぶこう「無功」さうあればそなたは料理が不巧なと見えた程に

（鱸庖丁―篇）

未熟。拙劣・孕常盤「馬追ふことは無功なれど」

ふごじり「畜腎」沙汰のない事ふご尻ぢや（繩綯―選）

畜のやうな大きく平たい腎。日本振袖始「畜腎に鰐足、歩き振
りは家鴨の所知入り」

ぶざ「無座」其様な推参を云はば不座ブザを云ひ付くるぞよ（伯養―

新撰）

退席。

ふさげる「塞げる」いや申し。方方をふさげましたに依つて、い

づ方へも御無心申さう方も御座りませぬ（仁王―五十番）

閉ざすやうにする。不義理をする。

ふさねる「総ねる」来月総ねてなりとも遣らうなどと思し召すこ
とが。こなたの身の上に。有まい事でないぞや（無布施経―新
撰）

束ねる。まとめる。頼朝伊豆日記「伊東、河津、宇佐美三箇の
所、これをふさねて久須美の庄と申すなり」

ぶさんぶさん「無算用」扱々そちは不算用な者ぢや（栗焼―選）
算用の下手なこと。無計算。

ふし「節」經十節取つたはく（咲嘩―三百番）

魚の身を堅に四分したものの一つ。

ふしかね「附子鉄漿」別してそのやうな女中は。附子鉄漿紅白粉
をつけ（金岡―三百番）

五倍子ふの粉を鉄漿に浸して作つた黒色染料。お齒黒。

ふじのやま…… 富士の山間はでも空に知られたり雲より上に見
ゆる白雪（入間川―篇）

『新勅撰集』卷十九にある仁和寺二品親法王守覺の作歌「富士
の嶺は問はでも空に知られけり……」による。

ふじまつ「富士松」そちは富士松を取つて来たと云ふが誠か（富
士松―三百番）

「松の一種落葉す富士及び日光山に多し」（俚言集覽・増補）。

落葉松。

ふしゅうしん「不執心」いやそれは不執心なに依つてぢや（井磧

―選）

執着心のないこと。不熱心。

ふしゅう「不承」名に掛替が入るものか。今ので不承せよと有つ

て（名取川―選集）

「不承知」の略。不本意ながら承諾すること。切支丹教義「売買を専とする者の為には不承なる法式たりと雖」醒睡笑「世の中はふせうばかりぞ」

ふしゅう「不祥」行き懸かつた不祥ぢや。挨拶を致さうと思ひます（三人僧―三百番）此様な所へ参りかけるといふは近頃ふせうの事ぢや迄（名取川―篇）

縁起の悪いこと。運の悪いこと。不吉。不運。

ふしゅう「無精」去りながら。人は内見と違うて。つつと不精

な者があるものじゃ（今参―新撰）

精を出さぬこと。怠惰。運歩色葉集「無性（ブシャウ）」

ふしゅうながら「不承ながら」不承ながらいんでたもれ（川上―

選）不承ながら戻らしめ（人馬―三百番）ふせうながら。まそ

つと御ざれ（苞山伏―記）

不承知でも。鑓の権三重帷子「ふしやうながら今爰で女房じや

夫じやと一言いふて下され」

ふしゅうぶしゅう「不承不承」あのふしやうぶしやうなつらは

（止動方角―能）

不承の強意語。

ぶしゅうもの「無精者」ぶしやうものを二人申付てやらばやと存

る（文荷―虎清）

怠け者。親愛の意を含めて主人が召使を呼ぶ代名詞。

ぶす「附子」さて此のあなたに附子が有る（附子―選）

鳥冠とりかぶとの根を乾して作つた毒薬。ぶし。明石の三郎「さけに、

ふすを入て、まいらせ候はんと、申ける」御曹子島わたり「てんくわのぼうに、ぶすの矢を持ちて、中にとりこめければ」

ふすべる「燻べる」其様にふすさせられた物では御座りませぬ

（瓜盗人―五十番）

「いぶす」の意で、苦り切つて不機嫌なさまをたとへて言ふ。

ふすま「衾」持仏堂に閉籠って衾をかぶり。座禅くうじて悟道する事があるによつて（花子―選）

座禅衾の略。

ぶせい「無精」随分とは存じますれ共、無精な事で御座ります

（比丘貞―大成）それもちねつねはたらきかふせいなによつて

しや（米市―記）

無精に同じ。淀鯉出世滝徳「ええ親子の衆がぶせいな」

ふせつぎ「伏せ継ぎ」愚僧が細工にふせつぎをあてゝ、ふせ縫ひに致しておきましたが（無布施経一篇）

伏せ縫ひにして当てる継ぎ布。ふせぬい参照。

ふせつしゆじよう…… 既に最勝経といふにはの。不殺衆生明德

寿命長遠と述べられた（射狸―三百番）

最勝経の中に見当らない。

ふせないきようにわ…… 布施無い経には袈裟を落す（布施無経―選集）

―選集）

諺。無報酬の仕事に対しては、粗略なやり方を以てするの意。

『毛吹草』や『世話尽』にも見える。

ふせぬい「伏せ縫ひ」ふせ縫ひとやらにしてくれました（布施無経―選集）

施無経―選集）

「伏せ」は隠す意で、縫目の目立たぬやうに縫うこと。楳入記

「縫ひやう、ふせ縫也」

ふせる「伏せる」あの菊が御庭前ので御座らば、春に成てちと苗

を被下い。愚像が眠蔵の庭へふせませう（布施無経―能）

低く植ゑる。這はせる。

ぶそうじ「無掃除」今日はいかう不掃除に御座るによつてなりま

すまい（萩大名―選）

掃除してないこと。

ふだい「譜代」汝は譜代の者ぢやに依つて。いつも心安う供を言

附くる（若菜―三百番）一生譜代にして召使はうぞ（弓矢―同上）

代代臣属にすること。蒙求抄「ソチカ妻ニキヌヲ三百匹ヲ、ツ

テクレタラバ夫婦共モニ譜代ヲ許ルサウト云タソ」、天草本伊

曾保物語「譜代のところを赦免して」、油糟「ふだいにしなら

ねば主もめをかけず」

ふたしなみ「不嗜み」こちらの頼ふだ人の様な不嗜な人は御座ざる

まい（止動方角―能）アア、そなたはふたしなみな（猿座頭―

能）

不謹慎。不用意。

ぶたしなみ「無嗜み」ぶたしなみな者どもじゃ（連歌毘沙門―古

本）

前項に同じ。釈迦如来誕生会「ぶたしなみな口中で」

ふたつしや「不達者」扱また某はかね／＼不達者でおりやる程に

（人馬―能）身共は生れついて不達者に御座るに依つて。鋤鋤

の辛勞がならぬ（木六駄―選）

達者でないこと。壮健でないこと。

ふたつどり「二つ取り」二つどりには留守がよい（千切木―大成）

二つ取ならば早うにたい者ぢや（連歌盗人―大成）二取りに

は馬にならぬやうにしてたもれ(人馬―三百番)二つ取りには。

目の見ゆるがましであらう(猿座頭―三百番)

二者択一。どちらかと言へばの意。好色一代女「やれきて浮世と思へども、二つ取りには見よきに如かじ」、同「中々危き世渡り、二つ取りには聲には厭なものなり」、世間胸算用「何れ二つ取りには万づにつけて都の事は各別なり」

ふたつなり「二つ成り」世に二つ成りさへ珍しいに。まして三つ

成りは稀な物ぢや(柑子―三百番)

果実が一枝に二つ一緒に成つてゐること。

ふだなり「札なり」一段札なりよさそうに御ざる(柿売―記)

高札を掲げた様子。

ふたりとも……二人とも渡れば沈む浮橋を(富士松―三百番)

『犬筑波集』に「……浮橋に」とある。

ぶち「鞭」ぶちばかりこしにさひておじやる(筑紫の奥―古本)

「馬の鞭をぶちはわろしと云う、鷹猿の時にはぶちといふと

ぞ」(片言)

ふちあんない「不知案内」不知案内にござる(鞍馬聲―篇)

無案内に同じ。

ふちだか「縁高」我等がやうなるにがき野老はふち高のすみをあなたへこり、こなたへこり(野老―大成)

縁の^{をしき}高い折敷(へぎ製の角盆)。易林本節用集「縁高」、江戸八

百韻「ふち高の蓋に一つの詩を書」

ぶちたたき「打叩き」又してもく酒に酔うてぶちたゝきを致します(石神―篇)

打擲。毆打。

ぶちはなす「打放す」此おたちでもつて。なにが御ざらふぞ。水もたまらず。ぶちはなして御ざる(武悪―記)

打ちつけて切り放す。

ぶちみず「打水」^{みづ}お鷹のぶち水の、びん水の、やり水の、水とこそ申せ、びんお冷とは申しますまい(お冷―五十番)

水を浴せること。

ぶちよう「無調」某は手前物事不調に^{ぶてう}ござれば、何とも迷惑いたす(蜘蛛盗人―五十番)

調はぬこと。不足。窮乏。

ぶちようほう「無調法」不調法を仕りました(寐音曲―選)これは不調法で御座る(伯母ケ酒―選)不調法を致いた(見物左衛門―選)そなたも余程不調法に生まれ付いた人ぢや(岩橋―三百番)

物事に拙劣なものを言ふが、最後の例外はすべて挨拶語。ふつき「富貴」御寿命といひ。御富貴といひ。何不足のない目出

度い祖父御様で御座る（蝸牛―選）

「ふうき」の音便。

ふつきふつきと「富貴富貴と」大社を信仰致いてよりこのかた、

何事もふつきくと吹き付くるやうに存ずるが（福の神―篇）

景気よく。豊かに。

ぶつきよう「物狂^{きやう}」なう、物狂やく（比丘貞・節分―能）なう

くぶつきやうやぶつきやうや（金岡―三百番）なうぶつきやうやのぶつきやうやの（浦島―同上）

物狂はしいことから転じて、心外な意を現す語。饅頭屋本節用

集「物狂^{ブツキヤウ}」、幸若、烏帽子折「但ぶつきやうにさうぞ」

ぶつく「仏供」我を信じて月詣ふで、仏供をそなへ歩みをはこべ

ば（八尾―能）

香華・燈明などの、仏に供へる物。ぶく。宇治拾遺物語「仏供

御燈なども絶えず」

ぶつけい「物詣」某は此はどうちつとひて夢みがあしひほどに、

ぶつけいいいたさうとぞんじて（花子―古本）

ものまうで。謡曲、竹雪「二三日物詣仕り候」

ぶつじ「仏師」堂は思ふ尽に出来て御座れども。仏師が御座らぬ

に依つて。仏を買ふ手だてが御座らぬ（六地藏―選）

仏像を彫刻する者。仏工。源平盛衰記「今天竺の仏師を得たり」

ぶっそかけて「仏祖掛けて」仏祖かけて堪忍致さぬ（歌仙―大成）

誓ひの詞。決して。必ず。御前義経記「仏祖かけてかける事なし」

ぶつち「仏意」ひとへに仏意に相叶うたと申すもので御座る（六

人僧―選）

「ぶつい」の連声。仏心。

ふつと わごりよまでふつととおりやらなんだなふ（墨塗―古

本）い来はふつとと参るまい（千切木―能）

必ず。決して。さつぱりと。とんと。謡曲、夜討曾我「ふつと

と罷り帰るまじく候」

ふつり 乙が居所をふつとつめつたれば（枕物狂―選）

強く力を入れるさま。

ふつと 石の唐櫃の尽のふつとなる迄謡ひ入れ（二千石―三百番）

吹き上げるさま。一杯になり溢れるさま。『能狂言』には「ふ

うと」、『狂言篇』には「ぶつと」とある。

ふつつ 何が扱此度はふつと御酒はとまりませう程に（石神

―選）此の後は釣りをふつふつと思ひとまりませう程に（釣狐

―選）以来ふつと博奕は思ひ止まらつしやれや（縄綱―選）

ふつり。すつぱり。断然。寿の門松「暴れ廻ることふつふつ

止め」、好色一代女「身のいたづら、ふつふつとやめて」

ふつふつと 頭に二つ。ふつふつと。細うて長うて。ぴんと跳ね

たを（兎―小舞謡）

際立つさま。

ぶつぽうあれば…… 仏法あれば世法あり（鉢叩―三百番）

諺。一方に仏の法があれば、必ず一方にはまた世俗の掟がある。謡曲、山姥「仏法あれば世法あり」

ぶつぽうばなし「仏法話」早う帰る筈でござつたれども、一つ二つ仏法話を申しかけられ、それ故隙をとつてござる（犬山伏―篇）

仏法に関する話。法話。法談。

ふてる 何共不申に遣はしましたに依て。ふてた物で御座らう（繩綯―能）

不平不満で、命令に従はぬ。

ふとくしん「不得心」人の世話して作るものを唯取ると言ふは不得心な事なれども（狐盗人―選）それに何処にか騙してやるといふ様な、不得心な事があるもので御座るか（繩綯―選）

不心得。下学集「不得心、無情也」、はちかづき「あの鉢かづきが近づき参らせんと思ふ心の、ふとくじんさよと、悪まぬ人はなかりけり」

ふところご「懷子」そなたは此の中までふところ子で、身持ちを知らぬによつてそのやうな事をいふ（鞍馬鞆―篇）

嬰児。転じて秘蔵子。毛吹草「外知らぬ雉子や山のふところ子」

ふなかた「船方」漕ぎ来る舟は面白や舟かた（住吉―小舞謡）

船頭。鷹筑波「其名を得たるふかなかたぞかし」

ふなぎおう…… 船競ふ。堀江の川の水際に。きゐつゝ鳴くは。都鳥かも（舟ふな―三百番）

『万葉集』卷二十に見える大伴家持の作歌。

ふなごこう「船後光」夫仏の後に後光と云ふものがある、ふな後光（小傘―大成）

仏像の背につけられた船の形の後光。舟形光背。

ふなでして…… ふな出して跡はいつしか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹（舟ふな―能）

出典未詳。

ふなばり「船梁」又あの中に横にある木をふな張りと申します（船鮒―篇）

水圧に対し形を維持するため、船内にわたした横木。

ふなびとも…… ふな人も。誰を悪ふとかあふ島の。浦かなしげに。声ぞ聞ゆる（舟ふな―三百番）

『源氏物語』玉葛巻に見える歌。

ふなゆさん「舟遊山」扱是は殊の外能舟遊山になりました（船渡―全書）今日はお若い衆の舟遊参にお出なさるゝ（痿痺―篇）

舟遊び。

ぶなん「無難」いや随分御無難にござる（鼻取相撲一篇）

無事。運歩色葉集「無難」^{ブナ}

ぶにくびおもさげらる「歩に首をも提げらる」歩に首をも提げられうずる者が。余人へも仰付けられいで。お手討に預つて忝いなどと云うて（二千石―三百番）

歩卒のやうな賤しい者に首をも打たれる。寿の門松「歩に首を提げらるが悔みはないか」

ふによい「不如意」某はことのはか、手前不如意におりやるが

（唐薬―五十番）身上不如意に御座つて。此の法事を勧めう手だてが御座らぬ（牛盗人―選）

意のままにならぬこと。特に経済方面のことについて言ふ。貧乏。醒睡笑「手前不如意なれば、孝養のいとなみ調へがたし」

ふねゆけば…… 船行けば岸移る、涙川の瀬枕。雲早ければ月運ぶ、上の空の心や上の空かや、何ともな（水汲新発意一篇）

『閑吟集』や謡曲の『現在江口』にも見える。

ぶねん「無念」身共は不念な事を致した（末広―記）扱々夫は不念な事でおりやるの（筑紫の奥―記）なか／＼、お断を申上げませうが不念でござりました（靱猿―篇）皆此方の不念で御座る（松囃子―三百番）

不注意。昨日は今日の物語「たんかう人のふ念とて、みなしかりた」淀河「無念して蛸にとられたると付也」

ふのり「布海苔」青海苔、布海苔、簾の笛買ひ集め、取り集め、日向の国に帰りけり／＼（伊勢物語―五十番）御被籤にふのり椎茸（宮廻り―三百番）

ふのり科の紅藻。和漢三才図会・伊勢国土産「海羅」^{フノリ}

ふひとがら「不人柄」最前の様な不人柄な者が、某が簪に成者で御座るか（樽簪―大成）

人柄でないこと。人品のよくないこと。

ふびん「不憫・不便」此の上は御不憫を加へられて下されい（業平餅―選）

あはれみ。慈悲。天草本伊曾保物語「だきかかへて不便を加へられた」

ふべん「不辯」ふべんなる所を見せてはづかしうこそあれ（今参―古本）

貧乏。甲陽軍鑑「武道を心がくる共、不辯にて事たらずば」鷹筑波「かさねるや破れ紙子に紙頭巾 不辯するがの安倍川に住む」昨日は今日の物語「ふへんなる御ふるまいをしていたす」ぶへんじ「無返事」あゝとは不返事な（脱殻―篇）

なま返事。重井筒「異議も言はれず不返事に、もちもちしてぞ

上りける」

ぶへんだて「武辺立て」殊に女の身として一人通るといふは、定
「て」武辺立て有う（鬼の継子一能）七つ下つて。人も通らぬ
この山中へ一人来るは。定めて武辺立てあらう（山賊簪一三百
番）

武辺（武勇）ある振舞をすること。

ぶほうこう「無奉公」主の声を聞忘るる程の不奉公では（寝音曲
一五十番）不奉公をして手討にした者も有り（入間川一選）
奉公に誠意を籠めぬこと。童子草「左様の者は主君にも不奉公
をし、人の心をまどはし」

ぶほうこうもの「無奉公者」内々不奉公者の武悪めがこと。色々
と思案をすれども、とかく生けて置く奴でない（武悪一選）
無奉公な者。

ふまえる「踏まへる」（一）あまのじやくと申は、御仏にふまへ
られて御座る、窮屈さうな御はとけで御座るか（仏師一能）
踏みつける。

（二）してわごりよは見事此寺を、ふまへさしますか（骨皮一
大成）

抑へる。支配する。太平記「石川城をふまへさせて」

ふむ「踏む」皆よつてふみませう（千切木一大成）

足の下にする。制裁を加へる。

ふやらのふやらのふん それ／＼申せ。太郎くわじや。ふやらの
／＼ふんと。おしやつたがよい（吟簪一記）

無意味な出まかせの言葉。二葉集「簪入の時宜も作法も習ひあ
り ふやらの夫婦はしまりの松 久任」

ふよう ふえうの水にうかみ、あさがほのひかげをまたぬていな
るに（魚説教一古本）

腐葉か、または蜉蝣の詛りであらうか。

ぶらめく 何が足がぶらめいて舞ひにくうはあれど（鬼が宿一三
百番）

ぶらつく。守武千句・追加「そうとなく手にもとられず掛け捨
ぬ なをぶらめくや夜のかつらき」

ふりつづみ「振鼓」ふり鼓（長光一能）（いたいけしたる物一選）

「〔塙囊抄〕小兒翫物字に鞞鼓フリツ、ミ。書経益稷鼓かたは
らのかなフリツ、ミ〔倭名鈔音楽部〕和名不利豆々美、如鼓而
小、持其柄一揺レ之則旁耳還自撃レ文」（俚言集覽）。天正十八年
本節用集「鼓 鞞 有之」

ふりゆう「風流」爰に風流のおもてが御さる程に、是をかけてお
どいて、酒を給うと存る（伯母が酒一能）

平安時代の華麗な装飾や作り物の称から転じ、中世の歌舞に於

いては、美しい服装をし拍子にかかつて舞踏するものを言ふ。
田楽・延年・狂言などの種類があるが、ここでは民間の盆踊的
風流をさす。

ふりよ「不慮」扱も扱も不慮な所へ参りかかつた事かな（鞍猿一
篇）

意外。不意。室町小歌拾遺集「思ひし事を今語らはで、又も逢
はずは不慮で候」

ふりよく「不力」しんだいふりよくしたれば。女房にさへ見捨ら
れた（箕潜一記）

無力。貧乏。犬筑波集「ふりよくにみゆるみや人のそて 千早
振かみきぬはかりかさねきて」

ぶるい「部類」某が部類眷属を残らず釣取つて（釣狐一三百番）
仲間。

ふるごしょ「古御所」とてももの事に、九条の古御所を見物して帰
らう（見物左衛門一二十番）

昔の御所。荒廃した御所。

ふるさけ「古酒」ふる酒こそは飲みたけれ（金津一選）

前年醸した酒。犬筑波集「みかさの山をたつるせいもむ 天原
ふるさけのめとしゐられて」、醒睡笑「なにと各はふる酒をさ
こしゆめすか」。

ふるはが……ふるはが二三まいのこつた（鞍馬参一古本）
諺。ふざけた詞。奥歯が三枚見えるの類。

ふるばくちうち「古博奕打」日本一の大ふのあの古博奕うちが
来て、我物と申を。判断なしてたび給へ（茶壺一全集）

老獺な者の罵語。古博奕。神田本太平記「例のふるばくちうち
にだしぬかれて」

ふるまい「振舞」これは立派な出立でおりやるが、何方ぞ振舞で
もおりやるか（鶏聲一篇）此の中方々の御参会お振舞は夥しい

事で御座る（輝り一三百番）とかく此様な所に。ゐていらぬ物
じや。酒はくれず。振舞はくはせずと存じ（菊の花一記）

もてなし。馳走。料理。醒睡笑「坊主あり、振舞によばれ、種
種食物の咄ありしに」

ふるまいの……振舞の座敷へ人の呼ざれば、犬句当は門にたゝ
住（伯養一能）

たたずむ者を犬にたとへた狂歌。

ふるみ「古身」古身たるべし（粟田口一三百番）。

刀身の古いこと。古刀。鎗の樵三重帷子「鎗の樵三が古身の槍」
ふる「風呂」（一）風呂を焚道金に取らせう（文相撲一能）

浴湯。

（二）この風呂の蔭から出させられい（塗師平六一選集）扱風

呂へ入れまする（塗附―大成）

漆器を乾かすための室^{むろ}。

ふろ「風炉」茶の湯の道具、風炉・釜・茶碗（長光―能）

茶の湯の席に置く、湯沸かし用の炉。土・木または円形鉄製でそれに火を起し、炉のかはりとし茶釜をかけて用ひる。

ぶん「分」（一）なかなか妄が分では留らせられませぬ（鈍太郎

―選集）其方の分として行力だては置いておくりやれ（柿山伏―五十番）扱々蚊の分として人間に交り（蚊角力―選）

分際。身分。天草本伊曾保物語「わがこの分になることは」、

天草本平家物語「宮はその分で三井寺にござったか」、幸若の和田宴や夜討曾我に「あのとのばらがぶむとして」

（二）汝が分として深がらせ（鼻取角力―三百番）そなたへは身共が参る分に極めたが（泣尼―選）

割当。分け前。宇治拾遺物語「己れがぶんとて送りたるは」

（三）いやむさとした事を申たぶんで御座る（大黒連歌―古本）やようかりもさうよの、と云ぶんの事でおやり（目近―能）

其分にめされ（金岡―選）其分心得候へ（唐相撲―選）

儀に当る限定語で、だけ・まで・ほど・くらゐ。天草本伊曾保物語「なかなかその分にせい」吉利支丹教義「なかなか其分なり」

ぶんざい「分際」身体おちぶれたれども。ぶんざい相應の理をわ

きまへぬではない（箕潜―記）

身分。私可多咄「むかしむかしぶんざいに過てせんじやうもの有」

ぶんべつ「分別」何と致さうと昼夜分別を致す所に（瓜盗人―選）

それはお前の御分別次第でござる（蚊角力―選）分別を以て。上々の射手にしておませうぞ（八幡前―三百番）

思案。工夫。天草本伊曾保物語「その時イソポこれを聞いて分別はしたれども」好色一代男「分別所なり」好色敗毒散「分別他事なければども」

ぶんべつもの「分別者」わごりよは分別ものじやよ（三本柱―古本）

分別のある者。

ぶんべつらしい「分別らしい」此方も分別らしい御方かと存じて

御座るが。むざとした事を仰せらるる（若市―全集）

分別のありさうな。

へ

へ、所詮非学者論議に負ずといふ事が有る（宗論―能）

侮る語。へん参照。

へい「幣」一のへいだて二のへいだて、三に黒駒信濃をとれ（鞍
猿一能）

ぬさ。みてぐら。御幣。馬の背に立てて、神体を象るのに使ふ
もの。

べい「可い」うるべひか（雁盗人―古本）先取べい物とはつたが
よい（折紙簪―大成）云ふべい事を音曲にかゝつて後を吟ずる
（音曲簪―三百番）

べき・べしの音便。史記抄「漢王の出づべい方へ、さし向けて
置たぞ」

べい「米」早田のべいを十俵、御年貢にさゝぐる（かくすい―古
本）
米。^{こめ}

へいけ「平家」日頃教へた平家を覚えてゐるか（井礪―選）

平家琵琶。醒睡笑「其時大衆あつと感じ、平家過ぎて同音には
めつるを」

へいけぶし「平家節」今度は平家ぶしで呼び出さう（呼声―篇）
平家琵琶の曲節。

べいせん「米銭」談合いたひて、べいせんをもらはふと存る（財
宝―古本）

米と銭。運歩色葉集「米銭^{ペイ}
セン」

へそ「綜麻」筒苧や、へそや、苧がせを、酒代の質に、取やりお
る事さらになければ（吃―全書）

續いだ糸をつないで、環状に巻いたもの。縋。和名抄「卷子問
蘇」

へたのながだんぎ 下手の長談義（泣尼―選）
諺。『毛吹草』にも見える。

へたのよこずき 下手の横好き（繩絢―選）

諺。

べちぎよう「別行」^{ぎやう}うけ給れば、へち行をなさるゝとやらん申は
どに（梟―古本）

特別の行法。謡曲、禪師曾我「我此の間別行の仔細の候間、百
座の護摩を焼かばやと存じ候」

べちのこと（別の事）汝等と呼出す別の事でない（牛盗人―選）
何の来たと云うて別の事も御座るまい（髭櫓―選）

格別のこと。変つたこと。大したこと。

べっかん「鼈羹」鼈羹か（文蔵―篇）

「安斉云、鼈羹は、摺立ての山の芋一升到砂糖二斤、赤小豆の
こし粉一升、小麦粉五勺ねり合せ、蒸して亀甲形に切るなり」
（嬉遊笑覧）。『易林本節用集』『温故知新書』『下学集』『運
歩色葉集』等にも見える。

べつして「別して」当年は別して寒氣も強いによつて（木六駄一選）

とりわけ。ことに。平家物語「南無八幡大菩薩、別してわが国の神明」

べにざら「紅皿」紅皿にてもうたずして（枕物狂一選）
臘脂を溶く皿。

べにぢよく「紅猪口」これは紅猪口か（瘦松一選）

臘脂を刷いた猪口。好色敗毒散「又禿の口ばかりありて、その色真赤いなるは、紅猪口の精」

へん へん。湯を沸かして水に入るとはこの事ぢや（止動方角一三百番）

侮る語。へ。

へんがい「変改」是は変改させられい（髭櫓一選）

変へ改めること。変更。破約。今宮心中「隠居様へ任せて在所はへんがいたがよい」

へんがえ「変がへ」さやうならば早う変替へをさせられい（小傘一篇）

前項の訛り。好色一代女「もし又入らぬとて変改せられては、傾城禁短氣「先の約束を何卒若い者が働きてへんがへし」

べんこう「辯口」都の者が辯口で夫ぢやと思ふたが（目近一大成）

辯舌。蒙求抄「辯口ダテノ口チキ、ダテヲスルホドニ」

へんし「片時」片時も急いで夜通しに戻れ（空腕一三百番）

暫時。平家物語「多日の経営を空しうして、へんしの灰燼となりはてぬ」太平記「片時の戦なりければ」

へんしん「返進」返進仕るといふて持てゆけ（腥物一記）
返上。太平記「勅答を申して、告文を返進せらる」

へんど「辺土」それがしもへんどにては人にくろづらをも見しられたに（昆布売一古本）

都の近郊。謡曲、鞍馬天狗「辺土においては比良、横川、如意が嶽」

へんない「変無い」うしやへんなやなう風ぢやもの（節分一選）

つまらない。甲斐がない。閑吟集「吹けども変ない物は尺八ぢや」四河入海「へんないばけをして有ぞ」

へんば「偏頗」しやばよりめいどへおもむくものにたづぬれば、へんばにはなす（朝比奈一古本）

えこひいき。不公平。かたておち。源平盛衰記「悪しくも偏頗し給へり」ひいきへんば参照。

べんぶ「紅麸」紅麸椎茸醍醐の土当帰芽（宗論一新選）
紅色に染めた麸であらうか。

へんべん「返辯」当月は返辯の御約束なれば、方々調へ見ますれ

ども（胸突―五十番）早速私が御返辯申します（此動方角―三百番）また身上ともかうも致したらば。返辯致しませうはさて（連歌盗人―同上）

返済。百日曾我「あたひを受けん様はなし、返辯いたす」

ほ

ほ。ほ。いたいけなお子ぢや（繩綯―選）

軽い驚きの声。

ほい アドへ愚僧は都本國寺の寺僧で御座る。シテへホイ（宗論―選）

事の意外さに驚く声。

ほいほい ほい―太郎くはじや。やいどこにゐるぞ（狐塚―記）人を呼ぶ声。

ほう（シテ）黒谷の出家でおりやるが、（テド）ホウ（宗論―能）

歎声。

ほうあて「類当」総じて鎧には冑類当などゝいうて小道具がある

（鎧腹巻―三百番）

防禦用の鉄製仮面。鉄面。太平記「あるひは類当をして、未だ

鎧を着ず」

ほうい ホヲイ／＼／＼／＼／＼（狐塚―能）

遠くの人を呼ぶ声。

ほうおい ホヲ、ハイ、太郎くはじや次郎くはじや、どれに居るぞ

。ホヲ、ハイ／＼（狐塚―能）

前項に同じ。

ほうかす 庭中に齒かけの足駄ぬぎ捨て、履く様なくて谷へ投かせ（伯養―篇）

「はかす」の延。捨てる。

ほうける「惚ける」そなたも悪しくは呆けぬよの（引括り―選集）

ばんやりする。ぼける。

ほうこう「奉公」身共へのほうこうには、是からすぐに見えぬ国へいんでくれさしめ（武悪―古本）

主に仕へる意から転じて、広く勤め・奉仕の義。

ほうごう「法号」ハア夜が更けたと見えて。地藏の法号を唱へ。

経陀羅尼の声ばかりぢや（川上―選）

仏菩薩の名号。

ほうこぐさ「ほうこ草」ほうこ草を着にて。いざや酒を飲まうよ

（若菜―三百番）

母子草の異名。春の七草の一の御形。

ほうさき あかいの坊のはうさきを。十斤ばかり。かいとり（茶壺―記）

穂先の延か、または木先の誤記であらうか。『能狂言』では「穂風」。木先ならば『四河入海』に「所贈の妙供の茶と云は……はしりつみのこさきの如雀舌なる茶ぞ」とあり、所謂はしりの茶のこと。

ほうさんずとめ「放参勤め」されども助かるたよりもありて、放散勤めの茶の子になしゝ其ゆゑに（黄精―篇）

禅宗用語。晩参（晩時の参禅念誦）を放免すること。従つてさうした勤務状態を言ふのであらう。天正十八年本節用集「放参ハウサン行参」運歩色葉集「放参ハウサン」

ほうし「蓬矢」毎年上頭へ御嘉例で蓬矢を捧げます（弓矢―篇）邪氣を払ふ蓬製の矢。

ほうし「法師」おれが主殿は、中国一の法師にて、日の茶を点ぬ事なし（茶壺―能）

「中国一の法師茶人の事成べし。今宗匠をさして大和尚と言類成へし」（狂言不審紙）

ほうじゅつ「方術」ゑんまもたまらず馬口勞の方術通れぬ地獄はなかりけり（馬口勞―篇）

しわざ。てだて。方法。

ほうじょう 某の鱸は、放情が喰ふて無いと云に依て（鱸庖丁―能）

『狂言篇』には法定、『狂言大成』には謀生とあり、『狂言不審紙』では「鰯ホウシヤウ鰯トフミサゴ」と記し、『物類称呼』では「鰯蟲一名かはむし。京にて。ほうじやうむし」と説く。柳田国男『石神問答』

に「庚申の夜の頌文に彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中離我見と唱へ候こと拾芥抄上・塵添壺囊抄卷十等に見え候右の三子は即ち三戸蟲の名にて候べし人類に迷惑を掛くこと此三神の如きは少なく候」とあるが、この彭常子から思ひついた語ではあるまいか。

ほうしん「亡心」この浦の漁師の手にかゝり、命を失ひし鰯の亡心なるが（鰯―篇）

亡霊。謡曲、鶴「頼政が矢先にかかり、命を失ひし鶴と申ししものの亡心にて候」

ほうず「方図」どこ方図もなう尋るで御座らう（察化―全書）

際限。範圍。博多小女郎浪枕「胴返し利なればとて、儲けるには方図がある」

ほうず「放ず」いざ酒蔵の辺りへいて氣をほうぜうではないか（棒縛―篇）

散らす。まぎらす。

ほうずの……「坊主の一本傘は貸さぬもの」其方は坊主の一本か

らかさはかさぬ物じや（骨皮新発意―記）

諺。縁起を忌む意。

ほうすべ「穂稽」小舟に取乗り。沖の方へ出て。ほうすべの先に
て神酒を飲み（夷毘沙門―三百番）

「ほしべ」の延び訛つたもの。しべ。わらしべ。

ほうだん「法談」一座の法談をも執行ひたう存じますれども（泣
尼―選）

説法談義の約。説教。

ほうちょう「庖丁」弓鞆庖丁基雙六（蚊見撰―選）

料理。芸能の一つに数へられてゐる。

ほうちょうにん「庖丁人」しかもそなたは庖丁人の子でありな
がら（鱸庖丁―篇）

料理人。庖丁師。醒睡笑「ある庖丁人のいひけるは」

ほうつかい「棒遣い」棒遣いを夫に持て御ざる程に、爰を明る事
は成りませぬ（鈍太郎―能）

棒を遣つて戦ふ術に長けた者。

ほうど（一）そなたの二三日くもほうど聞飽いた（千鳥―能）

おのれにほうど飽き果てた（法師が母―三百番）この物に蹴躰
くにほうど困つた（川上―選）此の戯絵にはほうど困つた（末
広がり―選）

ほとほと。全く。傾城禁短氣「ほうど困りはてること」

（二）肩先ほうど切付けて御座れば（空腕―選集）かの折れた
お太刀をほうど投げつけまして（空腕―三百番）

ぽんと。片言「ほうど」といふ言葉。物の碎けつ。おれつなどす
る時にのみいふべきにや。陪と書てほうどくだくとよむとか
や

ほうどす 是でほうどした。たすけずばなるまい（入間川―記）

ほうど困る。行き詰まる。

ほうのかわ「朴の皮」陳皮干姜朴の皮。桂心人参とり銅へば（人
馬―三百番）

朴の木の皮で、胃腸の薬に用ゐる。

ほうのもの「箔の物」扱々きやつは大きなうたを読ました。富士
をほうの物にたとへまして御ざる（餅酒―能）

下土器（盃からしたたる雪を入）の一種。「金箔などにてた
み絵を書き、色どりたるもの」（貞丈雑記）

ほうはつちょう「方八町」方八町に館を建て（三人長者―三百番）

方八町に堀を掘り（髭櫓―同上）

八町四方で、広い地域の称。

ほうはん「法飯」ほうあてに聞まかうで。ほうはんばし。くらふ
であるか（文三―記）

「有^ニ法飯者^ニ、此亦僧家之食也、尋常白飯上、置^ニ雜蔬・雜乾之煮炙細剉者^ニ浸^ニ未醬清汁之煎熟^ニ而食^ニ」(本朝食鑑)。甲陽軍鑑

「芳飯の事」、運歩色葉集「苞飯^{ハッ}」

ほういんどん 羯鼓笛琵琶しつりつ。打つは太鼓か。我劣らじと曲を尽さる。身共も樂を真似して見う。ホウヒイドン(見物左衛門―選)

雅樂の擬音。

ほうほう 追はずばなるまい。ホウく。ホウ(狐塚―選)

鳥を追ふ声。

ほうぼうがしら「茫^{ぼう}茫^{ぼう}頭」都には。処は無きか菊の花。茫々頭に咲きぞ乱るゝ(菊の花―三百番)

乱れ咲く花の形容。

ほうぼうする「方^{ほう}方^{ほう}する」此中の様に方々すれば。そち一人では使ひ足らぬに依つて(今参―三百番)

あちこちと出歩く。

ほうもん「法^{ほう}問」先法問を説しめ(宗論―能)

教義問答。当世はなしの本「ある浄土でらにぜんしうとほうもんしてまけてらをひらきけるを」

ほうりよう「方^{ほう}量^{りよう}」そなたに逢ずは方量も無う尋るで有う(麻生―能)先へと云へばほう量もなう先へうする(止動方角―能)

めくらじやとおもふてあなどつて居たればほうりやうもない(不聞座頭―能)あのやうな者に言はせて置けばほうりやうも無い事を云ふ(膏藥煉―選集)爰なやつに物をいせば方領がない(咲嘩―大成)

際限。運歩色葉集「法量」、毛詩抄「徳の美な事かぎり法量もないぞ」、同「返報を云ふならば、きり法量もない大功に、契当せう物がなないぞ」

ほうろくがなんす「炮^{ほう}烙^{ろく}鑪^{なん}子」ほうろくぐわんすに、ひの木ぢやおけに水のみのはたのかけたに(今神明―古本)

素焼の茶釜。「炮烙釜。陶製釜。利休所持。三升八合の容量だつたと云ふ」(末宗広「茶道辞典」)

ばかりばかりと おとがひに輝^{あかざ}が二三ばかりくときれにけり(井礪―五十番)

肉の切れて口を開くさま。『三百番集』では「はつかりばかり」ほける「恍ける」そなたも悪うははけぬよの(節分―能)

ほける。はれる参照。

ほしくわ…… ほしくはよさりの。ほしをとれ(二人大名―記)

諺。「欲し」と「星」を掛けた言語遊戲。

ぼしやぼしや 寐乱れ髪をぼしやくとゆり下げて、いつに忘れうぞおも影(花子―能)

髪の乱れてゐる形容。もちやもちや。

ほそいこしに……細い腰に細い帯したもの、のかいはなさいき
らしますな。しげない戯たはむねはせぬものぢや（若菜―五十番）
当時の俗謡であらう。

ほそなごうなる「細ながう長ながうなる」此祖父はけさからはそう長う
成つてまつて居ました（孫聳―大成）
待ちかねるさま。

ほそづくり「細づく作り」鯉をば刺身にする程に、いかにも細作り
手際ようさしませ（惣八―五十番）

刺身を細長く切ること。鯉などの淡水魚の場合が多い。大矢数
「鯉作り鯉の鱗をならべつゝ今日の儀は彼次第なり」

ほそたえがた「ほそ堪へがた」ほそたへがたとおもしろやな（今
参―古本）あらほぞ堪へがたや（節分―選）

「ほそ」は「細」「臍」両説があつて、傍証がないと定めにく
い。我慢できないの意。

ほぞぬけ「臍へた抜け」何とやら一つほぞぬけ致して。ところと落
ちましたに依つて、頓て言葉へたを掛けて御座る（柑子―三百番）
臍は帯。熟した果実が自然に帯から抜け落ちること。臍落ち。

ほそぬの「細布」十七八は、棹に干いた細布（細布―小舞謡）や
れ干せや細布（よしの葉―小舞謡）

幅の狭い布で作つた衣。細布衣。鷹筑波「細布やまおとこにま
できせぬらん」、犬子集「細布のひとへに思ふせんもなや」

ほそもの「細物」路銭のたしに致さうと存てほそものを用意致い
た（磁石―能）さりながら無刀では心元なうござる程に、何卒
其細物をお貸しなされて下されい（空腕―篇）
細身の太刀。

ほたて「穂蓼」誠に穂蓼ぢや（鈍根草―三百番）

蓼の穂に出たもの。好色一代男「これは面白い、鯖刻みて穂蓼
置き合すこそ心憎しと思へば」

ほつき「発起」（一）このお物語を承つて発起致いて御座る（釣狐
―選）

菩提心を起すこと。発心。

（二）さてそなたが発起ぢや。導師をめされ（瓢の神―三百番）
発起人の略。発起した人。

ほつき かむりの板にをしあてゝ二討うち三討うちはつき打ちやうちやう々ちやうちやうとうちけ
れば（文蔵―記）

物を打ちつける音を言ふ。ぽきり。史記抄「頸の骨がほつきと
折る」

ぽつきり 扱うどの枝にせうぞ。連つの事に大枝に致う。ポツキリ（
花盗人―能）

木の枝を折る擬音。

ほつくりほくりと 祖父の坂を上る様にはつくりほくりと、一字

く／＼にをしへて被下い（いろは一能）

ゆるゆると。ぼくぼくと。

ほつこむ 「打込む」溝川へぼつこふで、たばかつて打まして御

座る（武悪一能）

打ち入れる。ぶつこむ。

ほつこりと 身どもも爛をはつこりとして、一ぱい飲まう（木六

駄一五十番）

はかほかと。暖かなさま。片言「ほつこりは。あたまるかた

歟是もほは火成べし」、油糟「雲の上にも湯や沸すらんほつこ

りと洗ふたやうな月の顔」

ほつしりと こなたの目をほつしりと射貫く所であつた（千鳥一選）

「ほつしりは。的などに矢の当りたる音歟（片言）。はつしと。

ほつたり 罪のふかき衆生を、錫杖を取なほし、かいすぐふては

ほつたり、ついすぐふてはひつたり（地藏舞一能）

「ほたり」の促音化したもので、重みのある物が落ちる時に発

する音。ぼとり。

ぼつちり 此枝が能いポツチリ（花盗人一能）

小枝を折る擬音。或いはポツキリの誤写かも知れない。

ほつちりと 目がほつちりと明て、中／＼此分で「は」死れぬ

（鎌腹一能）

「ほつちり。ほつちは。寐入たる目を覺して開く貞歟」

ほつちりと 目をぼつちりと開いて見れば（宗論一能）

前項に同じ。

ほつてと 大盃で三つ五つ。ほつてとえふた（拔殻一能）諸侍に

欲しうもない水をはつてとくれた（入間川一選）夜がほつてと

更けたによつて（花子一選）

十分に。存分に。すつかり。

ほつてと 何かと申内には是は早日がぼつて暮た（空腕一能）口で

ぼつてともてなし。材木を売り附けて置いた（鞍馬聲一三百番）

前項に同じ。

ほつほつ 又急ぎでもなければ。身どもが一細工に。ほつ／＼致

すによつて。それで来年の今時分と申すことでおりやる（六地

蔵一記）

少しづつ、ゆつくりと事をするさま。

ほて いやア、ホテ（蚊相撲一篇）

相撲の際に行司のかける掛け声。『能狂言』や『五十番』では

「御手」となつてゐる。

ほていのからこあそび「布袋の唐子遊び」又当世ざれ絵さつとと

云ふたは表には布袋の唐子遊びかなどを書裏には秋の七艸など
さつと書いたをこそざれ絵とは云へ（末広がり―独習）

布袋和尚が唐風の衣装の小兒と遊戯してゐる図柄で、探幽始め
狩野派でよく扱う画題。

ほていのかわわたり「布袋の川渡り」ハアかけ物を掛けられた、
あれは亭主の自慢の、布袋の川渡り（千切木―大成）

布袋和尚が川を渡つてゐる図柄で、紀州徳川家旧蔵の『渡水布
袋』（心越和尚作）などで扱はれてゐる画題。

ほてつ やつとナ「手を打ち」ホテツ、勝つたぞくく

（鼻取相撲―篇）

「ほて」の強意語であらう。『三百番』では「おてつ」、「記」
では「御てつ」となつてゐる。

ほとけのかおも……「仏の顔も三度撫づれば腹を立つ」仏の顔も
三度撫づれば腹を立つと申すが。これが五度や七度の事では御
座らず（貫聲―三百番）

「地藏の顔も……」とも言ふ諺で、重度なれば、どんな温和し
い人も怒るの意。

ほとけもこころよりいずる「仏も心より出づる」仏も心よりいづ
ると云、経文もある（寐替―古本）

この通りの経文は見当らないが。『六祖壇經』に「もし仏を求

めんと欲せばただ心を求めよ」など見え、即心是仏の考へ方
は特に禪宗に多い。

ほどに「程に」御大音でござりました程に承りませう（蚊角力―
選）案内を乞うて引出さう程に（牛盗人―選）

故に。によつて。四河入海「孔子ナントモ夢ニモ見ヌトヲセラ
ル、ソホトニ」蒙求抄「上古ニハ道カ淳素ニアツタソホトニ」
ほどびようし「程拍子」目こそ見へずとも。程拍子を聞ひてなり
とも。慰まふ程に早う舞へ（不聞座頭―新撰）

間拍子。リズム。

ほねおぬすむ「骨を盗む」骨を盗まうでは御座らねども（木六駄
―選）全く骨を盗まうではない（泣尼―選）

骨を惜しむ。労苦を厭ふ。怠ける。鎧の権三重帷子「そこは乳
母が吞込んだ此方も骨は盗むまい」

ほねおれ「骨折」やれやれ骨折や（末広がり―三百番）

ほねをり。精出して働くこと。苦勞。

ほねもつづくこと「骨も続く事」身共は骨も続く事ではない（杭
か人か―三百番）

忍耐しきること。我慢し通すこと。

ほのぼのと……ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をし
ぞ思ふ（舟ふな・業平餅―三百番）

『古今集』卷九にある読人知らずの歌。

ほほ　ワア。こりや坊主にしをつた。ホ、南無三宝。大事の髪まで剃りをつた（悪太郎―選）

驚き歎く声。ほう参照。

ほやす「吼やす」秘蔵の悴を何故吠やいた（纏綿―三百番）ほえうおのれはほえいで。愚僧をほやしをる（泣尼―選）

「ほゆる」の使役形。「泣かす」の罵語。

ほやほや　はや／＼笑ふは（鬼の継子―新撰）

笑ふさま。喜ぶさま。国姓爺合戦「ほやはや笑ふ赤貝に」

ほゆる「吼ゆる」何をほゆるといへ（靉猿―選）

「泣く」の罵語。平家女護島「これ死にます死にますお助け

と、ほゆるも構はず前へかつぱと突き伏せ」

ほれる「恍れる」あゝわごりよも悪うはほれぬの（法師が母―三百番）

百番）

「ほける」に同じ。『易林本節用集』に「^{ホルル}毫」とあり、「醒睡

笑」に「さて／＼そちどもはほれ者や」の類似例が見える。

ぼろおん　此珠数にて一祈りの成らば、などか奇特のなかる

べき。ボロオン／＼／＼（禰宜山伏―能）

山伏の咒文。法螺貝の音とも言ひ、「勃櫓庵」の訛り、または

摩利支天の種子とも言ふ。

ほろば「保呂羽」ほろ羽（政頼―大成）

鷹の両翼の下にある羽で、矢羽として珍重する。ほろけ。ほろ。

ぼろりと　ぼろりとしたる往来の、／＼、茶がはりのなきぞ悲し

き（通門―能）

普通は涙の落ちるさまに言ふ副詞であるから、下の「悲しき」に応ずるものかと思はれるが未詳。『三百番集』には「ほろりと」となつてゐる。

ほろろおかく「ほろろを掛く」昨日は雉がほろろをかけて御座る

に依て（禁野―全集）

「ほろろ」は「ほろほろ」の約で、雉子などの鳴声を言ひ、

「掛く」は「打つ」とも言つて鳴くの意。

ほん「本」わたくしがいつわりを申さうか、あれはほんではござ

らぬ（墨塗―古本）

本当。まこと。曾根崎心中「たんとぶたれさんしたと聞いたが

ほんか」

ほん　ゑい。ぼん。ゑい。ぼん（箏―全集）

竹の子を抜く擬音。

ほんきゅう「本弓」いやそれではないほんきゅうの事じゃ（八幡聲

―記）

本式の弓。実際の弓。

ほんぎよう「本経」夫は本経には及ばぬ、空でも読む事ぢや（宗八―大成）

基本となる所依の経文の意の仏語から転じて、本を見て経を誦すること。

ぼんさん「盆山」扱もくおびたゞしい盆山かな（盆山―能）

盆の上に砂や小石で山の形を現した置物。易林本節用集「盆山」

ほんしよう「本性」先づ上つて嬉しうは御座れども。本性にな

らねば。何の役に立ちませぬ（水練聲―三百番）

正気。もとの正体。

ほんぜつ「本説」桜と申すが本説で、其上私は古歌にも覚えて居ります（花争―五十番）如月弥生の頃。花の開くといふ本説はあれども。月の開くといふ本説を。未だ聞かずと申されたれば（千句―三百番）

根拠となるべき確かな意見。非説の対。

ほんに「本意」また御めにかからねば本意になし（塗師―能）住

馴た花の都をふり捨て、他国へ参ると申は本意には御座らね共

（雷―能）

本当の気持。本懐。はい。天草本伊曾保物語「このごろは無音本意を背いてござる」

ほんのうあれば……「煩惱あれば菩提あり」仏法あれば世法あり。

煩惱あれば菩提あり（鉢叩―三百番）

謡曲「山姥」の文句取り。

ほんのちゃ「本の茶」一族の寄合に、本の茶を点んと、五十貫のくりを持、おほくのおしを遣ふて、兵庫の津にも着たり（茶壺―能）

「倭邦には梅尾の明恵上人始て種を梅尾に植たり自此国々にひろまり今宇治も此後に起れり其比梅尾より出る茶本の茶と名附他国より出たるを非の茶と号」（狂言不審紙）

ほんほん「本本」ほんくにござらぬか（薩摩守―記）いや申はんぼんのくわしやで御さる（抜殻―記）

「ほん」の意味を強めたもの。天草本平家物語「ほんく」に節をつけて語りませう」吉利支丹教義「是即本本の道より受け奉るに於てはの事なり」

〔出典略称〕 〔書 名〕

- 虎 清……大蔵虎清自筆狂言八番（川瀬一馬編）
 古 本……古本能狂言集（笹野堅編）
 能……能狂言——岩波文庫（同右）
 全 集……狂言全集（幸田露伴編）
 全 書……能間狂言全書（伊藤喜一郎編）
 選 集……狂言選集（和田萬吉編）
 独 習……狂言独習全書（内藤加我編）
 二十番……狂言二十番（芳賀矢一編）
 補 遺……狂言記補遺（長谷川福平編）
 五十番……狂言五十番（芳賀矢一編）
 百 番……狂言百番（斎藤香村編）
 篇……狂言篇（同右）
 大 成……和泉流狂言大成（山脇元照編）
 正 本……新編狂言正本（野村萬斎編）
 新 撰……新撰狂言集（同右）
 集 成……狂言集成（野々村戒三・安藤常次郎編）
 選……狂言選（和田萬吉・野々村戒三編）
 三百番……狂言三百番集（野々村戒三・安藤常次郎編）
 記……狂言記（外・続・拾遺とも）

附記 これは「東京女子大学 論集」第七卷第二号所掲分に、すぐ接続してハ行を完了させたものである。従つて本稿の目的や経過などについては、すべて右の前書きにゆづり、ここにくり返す煩を避けたいと思ふ。彼此参照していただければ幸甚である。（三二・二・一〇）

—— 本学教授 ——